

ウズベキスタンにおける中央アジア史研究の現状

久保 一之

ソ連におけるゴルバチョフ政権の誕生とそれに伴う一連の改革は、戦後国際政治史上最大の問題であった東西冷戦の終結を予感させ、学術研究の分野においては、ソ連学界の閉鎖的体質の改善、西側諸国との人的交流の活発化を期待させた。この機運を見逃さなかった日本の若手ロシア・ソ連研究者や大学院生たちは、悲願とも言えるソ連留学制度の確立に向けて「日ソ交換留学制度を望む連絡会」を組織し、粘り強く運動を続けた。そして1988年12月、ついに日ソ交換留学制度が発足し、翌1989年の9月には第一期「ソ連政府奨学金留学生」20名がソ連の地へと旅立ったのである。

そういう経緯や「連絡会」の努力など筆者は何も知らなかったが、希に見る幸運に恵まれ、第二期「ソ連政府奨学金留学生」の一員としてソ連留学の夢を果たすことができた。残念ながら、筆者が滞在した1990年10月から1993年3月までの二年半、彼の地では市場経済の導入、諸共和国の独立、ソ連の崩壊といった一連の政治・経済上の変革が混乱を招き、元来の研究環境の悪さと相俟って、留学生活は決して快適なものではなかった。更に筆者の場合、ロシア連邦ではなくウズベク共和国(現ウズベキスタン共和国)を留学先に選んだため、共和国独立(1991年8月)の煽りで、日ソ交換留学の規定に基づく期間延長を拒否されるという憂き目を見た。しかし、筆者が留学した同共和国の首都タシュケントは、周知の如く、モスクワやサンクト・ペテルブルグ(旧レニングラード)と並ぶ旧ソ連東洋学を中心であり、こと中央アジア史研究に関しては、研究の活発さや研究者の層の厚さにおいて旧ソ連随一である。筆者自身、外ならぬタシュケントに留学したことによって、語学学習上の成果は勿論のこと、資料収集や先行研究の消化、現地研究者との交流においても、二年半という時間に見合った成果を上げられたのではないかと考えている。

本稿は、留学期間中に得た知識を基にして、これまで日本では余り知られていないウズベキスタンの中央アジア史研究とその現状を紹介しようとするものである。また同時に、今後ウズベキスタン、特にタシュケントにおいて留学や研究活動を予定されている方の、

手引きともなるよう心掛けるつもりである。

尚、本文中、原則的に固有名詞の原表記はロシア語、カナ表記もロシア語風とするが、ウズベク語の出版物の題名はウズベク語で、紛らわしい人名についてはロシア語とウズベク語両方で原表記を示す。

I

まず最初に、旧ソ連における学術研究の分野区分で言うところの、「東洋学」を中心に、ウズベキスタンにおける中央アジア史研究の沿革を簡単に述べておきたい。

革命以前にもトルキスタン考古学愛好会 *Туркестанский кружок любителей археологии* (1895-1917)が考古学の分野に止どまらぬ活発な研究活動を展開したが、旧ソ連領中央アジアに近代的学問として東洋学が確立されるのは十月革命後のことである。1918年11月タシュケントにトルキスタン東洋大学が設立され、アンドレーエフ *М.С.Андреев*、セミョーノフ *А.А.Семёнов* ら在地の研究者が教鞭を取り、ロシアから時折訪れるパールトリド *В.В.Бартольд*、マーロフ *С.Е.Малов* らも講義を受け持った。初年度の学生は234名(中央アジア原住民族は僅か16%)で、東洋諸言語、トルキスタンと周辺諸国の地理学や民族学、中央アジア史、イスラーム史、イスラーム法などの科目があったという。ボロフコーフ *А.К.Боровков* (言語学)、イワーノフ *П.П.Иванов* (歴史)、マッソーン *М.Е.Массон* (考古学)、スーハレワ *О.А.Сухарева* (民族学)らはここで学び、後に各々の専門分野でソ連を代表する研究者となった。トルキスタン東洋大学は1924年中央アジア大学(1920年トルキスタン大学の名称で創立)の東洋学部にも再編され、サンクト・ペテルブルグ大学東洋学部出身のシュミット *А.Э.Шмидт* が学部長となった。以後、中央アジア大学の東洋学部と歴史学部が中央アジア史研究の中心となり、東洋学部は文献学・文献史学、歴史学部は考古学や貨幣学の分野で多くの研究者を輩出した。現在ウズベキスタンで活躍している中央アジア史研究者も、殆どの者が中央アジア大学か、その後身タシュケント大学 *Ташкентский государственный университет им. В.И.Ленина* の東洋学部や歴史学部の出身者である。

しかし、旧ソ連全体で見られるように、やがて大学は学術研究機関としての性格を弱めてゆく。科学アカデミーの組織が拡大し所轄研究機関が充実してきたからである。

ソ連東洋学界の中心であり最も権威ある研究機関、ソ連科学アカデミー東洋学研究所 *Институт востоковедения АН СССР* は1930年レニングラードに設置された。ウズベキスタンでは1943年ソ連科学アカデミーのウズベク支部がウズベク共和国科学アカデ

ミーに再編され、翌1944年には国立図書館東洋部門の組織と蔵書を基礎に、科学アカデミー東洋写本研究所が設立された。初代所長には現地学界随一の碩学セミョーノフが就任した。写本研究専門の研究機関が設立されたこと自体が、ウズベキスタンに所蔵される写本の分量の膨大さを物語っており、現在の研究者によく見られる史料研究最重視の姿勢は、当時から受け継がれてきたものであろう。また、正にこの時期(1942-44)大祖国戦争の戦火から逃れ、ソ連科学アカデミー東洋学研究所が、レニングラードからタシュケントに移転されていたことは特筆に値する。革命以前からサンクト・ペテルブルグ(レニングラード)の東洋学者たちは頻繁にタシュケントを訪れ、近代的学問の伝統の浅い、現地の研究者に大きな影響を与えていたが、この時期における、バルテールス E.Э.Бертельс、コーノフ A.Н.Кононов、ペトルシェーフスキー И.П.Петрушевский、ヤクボーフスキー A.Ю.Якубовскийら名だたる大家との交流は、ウズベキスタンの研究者たちにとって大きな財産となったであろう。1950年のソ連科学アカデミー東洋学研究所本部のモスクワ移転後も、ウズベキスタンの東洋学界はレニングラード学派との密接な関係を保持し、現在の著名な研究者の中には、タシュケントで大学卒業、レニングラードで大学院修了・準博士号取得という経歴をもつ者が多い。

東洋写本研究所は1950年に名称を東洋学研究所と改めて現在に至り、ウズベキスタン東洋学の中心として、また世界有数の写本コレクション所蔵機関として知られている。この外タシュケント所在の様々な科学アカデミー所轄研究機関が戦後ウズベキスタンの中央アジア史研究を担って来た。歴史・考古学研究所(後に考古学部門が分離独立してサマルカンドに移転)、言語・文学研究所(1991年言語学研究所と文学研究所に分離)、比較的最近設立された写本研究所などがそれである。また、科学アカデミーではなく文化省所轄の芸術学研究所も独自の役割を担っている。これら諸研究所の発展によって、ウズベキスタンにおける中央アジア史研究はアプローチの方法が多様化し、研究者の層も厚くなった(その研究成果の一端は間野英二「トルキスタン」『アジア歴史研究入門4 内陸アジア・西アジア』(同朋舎, 1984)と小松久男「中央アジア」『イスラム都市研究[歴史と展望]』(東京大学出版会, 1991)で知ることができる)。一方、大学は教育機関としての性格ばかりが強まり、現在、一部の分野を除いて、大学教員で一線級の研究に従事している者は極めて少ない。また、かつて斬新な研究成果が発表されていた大学紀要も1960年代にはその魅力を失い、科学アカデミー発行の学術誌の影に隠れてしまったのである。

ここで、留学期間中筆者の目に触れた大学の現状について少し述べておく。先述の留学制度では留学生は国民教育国家委員会所轄の大学所属となり、筆者はタシュケント大

学歴史学部在籍したが、研究活動上付き合う必要性を感じたのは専ら科学アカデミー諸研究所の研究員たちであった。それでもタシュケント大学歴史学部では、あのマッソーン、プガチュンコワ Г.А.Пугаченкова と続いた伝統を受け継ぐ考古学学科が発掘・研究活動を活発に行っているようで、スタッフは全て女性である。二年目からはタシュケント大学から独立して間も無いタシュケント東洋学大学 Ташкентский государственный институт востоковедения (前身はタシュケント大学東洋学部)に在籍した。最近同大学を中心に東洋学関係の啓蒙雑誌(月刊)『東洋の灯火(Маяк Востока / Шарқ машъали)』の刊行が開始され、筆者が所属した歴史学部中央アジア史学科では学科長アフメドジャーノフ博士 Г.А.Ахмеджанов を始めスタッフは近現代史の専門家が揃っている。筆者は同大学文学部ウズベク語学科にも出入りして現代ウズベク語を学習したが、同学科はウズベク語の国語化に対応して非ウズベク系学生のウズベク語教育に従事している。筆者を担当した学科長イスマイロフ氏 А.Исмаилов とハビブッラーエフ氏 А.Хабибуллаев はペルシア語にも堪能で、極めて有能な教師であった。同学科では両氏を中心に現在絶対的に不足しているウズベク語学習教材の開発に情熱を注いでおり、その成果は外国人のウズベク語学習にも裨益するところ大であろう。

II

それでは次に、現在ウズベキスタンの中央アジア史研究を担っている、共和国科学アカデミー所轄の諸研究所の活動状況を紹介する。紙幅に限りがあるので、研究所の構成や個々の研究者にまで言及するのは、中央アジア史研究と特に関係の深い、東洋学研究所と歴史研究所に限ることとする。また、筆者の専攻分野の関係から、モンゴル侵入期以降の前近代史の研究状況に重点を置くことをお許しいただきたい。

まずは東洋学研究所 Институт востоковедения им. А.Р.Беруни АН РУз である。現在の所長は、ティムール朝期のペルシア語文献の研究で内外に知られ、人望も厚いウルンバーエフ博士 А.У.Урунбаев(Ўринбоев) である。博士はティムール朝末期の詩人ジャーミーの自筆書簡集の研究で博士号を取得され、その研究成果は公刊されている(Письма-автографы Абдуррахмана Джами из “Альбома Навои”.1982.)。現在東洋学研究所は以下の10セクション(отдел)で構成されており、各セクション10人前後の研究者が所属している(セクションに付された番号は便宜的なものである)。

1. 写本の保存・一次処理／主任：ムニーロフ К.М.Муниров (写本研究)

ここに所属するジュラーエワ女史 Г.А.Джураева は16世紀末ブハラのワクフ文書

の研究で知られ、その研究成果の本格的発表が待たれる。

2. 写本刊行[科学史・文化史関係]

主任：アシュラフ・アフメードフ А.А.Ахмедов (ウルグ・ベグ天文表の研究)

ビールーニー研究で著名なブルガーコフ博士 П.Г.Булгаков やイブン・スィーナー研究のカリーモフ博士 У.И.Каримов ら科学史や文化史の専門家が揃っている。

3. 写本・文書の記録と目録化[史料研究]／主任：ウルンバーエフ(所長と兼任)

ブハラ・ハン国期のペルシア語文献や文書の専門家 ヴィリダーノワ女史 А.Б.Вильданова や、ティムール朝期ペルシア語文献の専門家ユスーポワ女史 Д.Ю.Юсупова らが所属している。ヴィリダーノワ女史は最近サファヴィー朝期の国家行政の手引書を露訳し(Мухаммад-Рафи' Ансари, Дастанур ал-мулук. 1991), ユスーポワ女史はティムール朝末期の歴史家ホーンダミールの諸著作の研究で博士論文を提出, 近々公刊される予定である。

4. 中央アジアと中国の文化交流

主任：アブラト・ホジャーエフ А.Х.Ходжаев (清代の東トルキスタン)

世界的に知られる中世ウズベク史・文献学の大家ブリー・アフメードフ博士 Б.А.Ахмедов が所属。唯一中国, 及び中国語文献を扱うセクション。

5. 南アジア諸国の諸問題／主任：クーチナ М.М.Кутина (インドの民族解放運動)

6. 中近東／主任：ババホジャーエフ М.А.Бабаходжаев (アフガニスタン近代史)

7. 中央アジアと東洋諸外国の文学及び文学交流

主任：ホジャーエフ Р.У.Ходжаев

8. イスラーム学／主任：ウスマーノフ М.А.Усманов

新設セクション。ソ連時代に一度廃れた分野であるだけに早急に成果を期待するのは難しいが、若手のバフティヤール・ババジャーノフ氏 Б.Бабаджанов が行っている研究は注目に値する。神秘主義教団を研究対象とする氏は、聖者伝や碑文という難解な史料を自在に扱い、最近では16世紀後半の有力シャイフ間の抗争について研究を進めている。更に、氏はウズベキスタンの主なマザールを全て実地調査して碑文テキストを収集しており、その校訂テキストや翻訳の発表も期待される。

9. パーブル及びパーブル朝の時代

主任：アズィムジャーノワ С.А.Азимджанова (パーブルとその著作の研究)

新設セクション。現時点では専門家と呼べる者は極めて少ないが、これまで殆ど未研究のテーマであるだけに、史料発掘も含めた研究成果が期待できよう。

10. 中央アジア外交関係史

主任：マンナーノフ Б.С.Маннанов（副所長と兼任；ロシア・イラン関係史）

※この外、所属は確認していないが、ブハラ・ハン国期の奴隷関係文書とそのウズベク語訳（*Бухоро феодал жамиятида қуллардан фойдаланишга доир ҳужжатлар*. 1990）を出版したファイズイーエフ氏 Т.Файзиев も注目すべき研究者である。また、若手では、ティムール朝期文献や神秘主義の専門家、諸言語に通じ欧米の研究にも詳しい、ハビブッラー・カラマートフ氏 Х.Караматов(Кароматов) の名を挙げておきたい。

以上のように、東洋学研究所では、全般に文献学・史料研究が大きな比重を占めている。これは研究所に所蔵される膨大な写本コレクション（写本1万8千冊／4万作品；文書数万点）の研究を自らの使命としているからである。また、東洋学と銘打ちながら、対象とする地域は、ウズベキスタンとその周辺諸国に限られており、外国研究に関してはソ連時代以来政治的意図が感じられ、専ら近現代史上の問題が扱われている。

出版物としては1990年からウズベク語の機関誌『東洋学(Шарқшунослик)』を年1回発行している。また、最近この研究所で刊行されたものの中に、これまで敬遠されがちであった、イスラーム神秘主義をテーマにした論文集があるのは注目される（*Из истории суфизма : источники и социальная практика*. 1991）。今後の出版予定としては、所蔵写本のテーマ別カタログ（歴史、医学、自然科学は既に準備済み）と、約3000点のブハラ・ハン国文書カタログ（責任編集：ヴィリダーノフ）が大掛かりなもので、ウルグ・ベグ生誕600年記念事業として、ウルグ・ベグ天文表露訳、カーディーザーデー・ルーミー他サマルカンド学派の作品の露訳なども出版準備が進んでいる。

次に歴史研究所 Институт истории АН РУз を紹介する。現在の所長は考古学者のアスカーロフ博士 А.А.Аскаров である。最近歴史研究所では全面的に新たな研究者雇用システムが導入された。それは、複数の研究員が共通の研究テーマを掲げて「学術共同研究班(НИК : научный исследовательский коллектив)」を組織し、研究員各自が直接研究所と契約するというものである。契約は2～3年単位で研究者は毎年業績審査を受けねばならず、間接的な人員整理の推進策であるらしい（東洋学研究所でも部分的に導入済み）。しかし現時点では従来のセクション毎の結束・活動が根強いので、本稿では学術共同研究班ではなくセクション単位で紹介する。歴史研究所も東洋学研究所と同じく各セクション10人前後で、以下の10セクションで構成されている。

1. 中世期のウズベキスタン史

主任：ナーズィム・ハビブッラーエフ Н.Н.Хабибуллаев (紙の生産史)

中央アジア考古学の世界的権威プガチェンコワ博士はここに所属している。筆者の指導教官で中世手工業の研究で知られるムクミーノワ博士 Р.Г.Мукминова は実質上このセクションの統率者で、若手のエリヨール・カリーモフ氏 Э.Э.Каримов (ホージャ・アフラルの研究)とアグザーモワ女史 Г.А.Агзамова(Аъзамова) (ヴォルガ経由交易の研究)を指導している。また中央アジア・ロシア交易を研究するミハレーワ女史 Г.А.Михалева は既に二冊の研究書を発表済みである。

2. 1920年代のウズベキスタン史／主任：ラジャーボワ Р.Я.Раджапова (民族運動) 内戦,バスマチ運動,ブハラ革命,民族国家の建設,社会・政治思想などを扱う。

3. 1930年代のウズベキスタン史／主任：アキーロフ К.А.Акилов(Оқиллов) ネット,工業化,コルホーズ,民族国家への分割,土地改革などを扱う。

4. 1940-80年代のウズベキスタン史／主任：アリーモフ И.А.Алимов(Олимов) 大祖国戦争の諸問題,戦後問題(特に国民経済の復興)を扱う。

5. ペレストロイカ期のウズベキスタン史／主任：イスハーコフ Ф.Б.Исхаков ペレストロイカの諸問題,共和国の独立,経済問題,民族問題を扱う。

6. 史学史／主任：アリーモフ Д.А.Алимов(Олимов)

1920年代から30年代のウズベキスタン史学史を扱うが、特に1920年代の文献の量は膨大で、現在は専らそれらの文献に取り組んでいる。ロシア・ソ連の中央アジア研究史の専門家として知られるルーニン博士 Б.В.Лунин はここに所属している。

7. ウズベキスタンの歴史・文化遺跡の研究／主任：アミーノフ Р.Х.Аминов 遺跡保存を目的としており、考古学や芸術学など様々な分野の研究者が揃っている。

8. 19世紀末～20世紀初頭のウズベキスタン史

主任：ズィヤーエフ Х.З.Зияев (中央アジア・シベリア関係史)

ハン国時代末期,ロシアの中央アジア征服,民族解放運動などを扱う。

9. 社会学／主任：サビーロフ А.Т.Сабилов

現代ウズベキスタンの住民諸集団の分析,コルホーズの労働者や知識人の政治意識調査などに従事。ウズベキスタンで社会学者が組織的に集められた唯一の場所。

10. 民族学／主任：シャニヤゾフ К.Ш.Шаниязов (ウズベク民族史)

民族起源の問題,民族史上の諸問題,文化の伝統や風習を研究している。

以上のように歴史研究所では、地域的には専ら中央アジア・ウズベキスタンが研究対象とされており、時代的には近現代が中心である。ソ連時代には最も鋭にイデオロ

ギーが反映された分野であるが、時代が変わった今、歴史的事象の見直しや再評価が進んでおり、その成果が大いに期待される。

定期刊行の学術誌はないが論文集の出版が盛んで、最近「歴史学の緊急課題」と題するシリーズの中で中世末期の中央アジア都市が特集されたのは注目に値する(Позднефеодальный город Средней Азии. 1990)。現在出版準備中のものでは、まず『ウズベキスタン諸民族史(全6巻)』が注目される(第1巻と第2巻は考古学研究所の担当)。言わばソ連時代の共和国“正史”『ウズベク共和国史』の改訂版として企画されたが、ペレストロイカの進行と共和国の独立によって編集方針は大きく改められた。新時代のスタンダードな概説として、充実した内容を期待したい。また、民族意識の高まりを反映してか、初めて本格的なウズベク民族史『ウズベク—歴史民族学的概説(全2巻)』が刊行される。東洋学研究所と同じくウルグ・ベグ生誕600年の記念企画もあり、論文集『ティムールとウルグ・ベグ—歴史と個人・社会と文化』の出版準備が整っている。

このほかにも科学アカデミー所轄の様々な研究所が中央アジア史研究に関わっている。言語学研究所と文学研究所は1991年に分離するまで言語・文学研究所 Институт языка и литературы им. А.С.Пушкина АН УзССР として活動し、ナヴァーイー著作集のウズベク語版(全15巻)とロシア語版(全10巻)の刊行に貢献した。現在は全20巻のナヴァーイー全集(ウズベク語)を刊行中である。隔月刊の機関誌『ウズベク語・ウズベク文学(Ўзбек тили ва адабиёти)』を発行している。1978年蹟学スレイマーノフの功績によって設立された写本研究所 Институт рукописей им. Х.С.Сулейманова АН РУз は、文学作品の写本を多数所蔵し、東洋学研究所とは異なった角度から写本研究を行っている。機関誌『文学遺産(Адабий мерос)』は年4回発行されている。また、文化省所轄の芸術学研究所 Институт искусствознания им. Хамзы Министерства культуры РУз にも美術史や貨幣学の分野で世界的に知られるルトヴェラーゼ氏 Э.В.Ртвеладзе を始め、考古学や芸術関係の様々な分野の専門家がいる。最近は創価大学との共同発掘調査で成果を上げているが、考古学以外の分野でも、音楽に関するリサーラの研究(ジュマーエフ氏 А.Б.Джумаев)や写本装飾の研究(イスマイーロワ女史 Э.М.Исмаилова)など、興味深い研究が行われている。

以上の諸研究所は全て首都タシュケントに設置されているが、古代史研究の中心、考古学研究所 Институт археологии АН РУз はサマルカンドにあり、最近研究所内にユネスコ支部が設置された。『ウズベキスタン物質文化史』と題される論文集を年1回刊行している。また、日本や欧米では余り知られていないが、プハラ在住のカザコフ氏

Б.А.Казаков は文書研究の専門家として有名で、主にブハラ建築芸術博物館(アルク)所蔵の文書を扱っており、氏の長年の経験を生かした文書研究の入門書が出版されている(*Документальные памятники Средней Азии*. 1987)。

ここで、中央アジア史研究に関わる、現地の史料所蔵機関や図書館も紹介しておきたい。写本では前述の東洋学研究所のコレクションが世界有数のものであるが、文書に関しては中央古文書館 *Центральный государственный архив РУз* のコレクションが最大である。ここにはコシュベギ文書8万7千点、ヒヴァ・ハン国文書2万点、コーカンド・ハン国文書5千点、ワクフ文書2千点など、前近代中央アジアに関する膨大な分量の文書群のみならず、植民地時代、内戦期、ブハラ・ホラズム両人民共和国、民族国家の形成などに関するロシア語文書も多数保存されている。また、タシュケント以外では、前述のブハラ建築芸術博物館が2千点以上の文書を、サマルカンド大学中央図書館は7千冊(2万5千作品)の写本を所蔵している。その外の都市にも写本・文書が保管されているというが、全容は明らかにされていない。タシュケントの独立広場(旧レーニン広場)にある共和国最大の図書館、ナヴァーイー図書館 *Государственная библиотека им. А.Навои РУз* には写本など未公刊文献は少ないが、ロシア語、現代ウズベク語を始め旧ソ連地域の諸言語による出版物が揃っている。やや規模は小さくなるが科学アカデミー中央図書館 *Фундаментальная библиотека АН РУз* も科学アカデミーの出版物を中心に学術研究に適した蔵書を誇っている。

III

最後に、筆者の目を通して見た、ウズベキスタンの中央アジア史研究の全般的な特色、最近の潮流、当面の課題についてまとめておきたい。

ウズベキスタンに限らず旧ソ連の学界全体に言えることであるが、生の史料に恵まれていることもあり、文献学や史料学(写本・文書・碑文・貨幣研究)の分野で高い研究水準を誇っている。これらの分野でこれまで優れた研究者を多数輩出してきたが、現在も研究者の層が厚く、それ故研究者個々の掲げる研究テーマはかなり細分化している。加えて国史研究であるが故に、研究者、特にウズベク人研究者の研究対象に対する思い入れの強さは、外国人研究者の比ではない。このような傾向は、他の地域では考えられないような、研究の蓄積を生み出している。例えばウズベキスタンで最も敬愛されている歴史上の人物ナヴァーイーに関して、欧米では近年になって利用され始めた史料(*Khwāndamīr*, *Makārim al-akhlāq*)が、タシュケントでは1948年に翻訳・出版されており、

最近では、同時代人が書き残したナヴァーイー関連記事の集成が、一般向けの読み物として出版された(*Навоий замондошлари хотирасида*. 1985)。また、ナヴァーイー生誕600年(1991年)を記念した一連の出版物の中に、小冊子ではあるが、同時代の医師たちや、ナヴァーイーの著作を書写した能書家たちに関する研究があったのには驚かされた。

だが、このような文献学・史料学の重視や研究テーマの細分化が、時として研究者に安直な逃げ道を与えるというのもまた、事実である。若手研究者の中には、史料を一つ漫然と翻訳しただけで準博士(*кандидат*)となって専門家の仲間入りをし、自身の研究テーマから外れた対象に対して、極めて冷淡で無知な者が少なくないように思う。これは、大学で行われている教育と学術研究との間に大きなギャップがあり、専門家養成のための訓練の場が不足していることにも原因を見出せよう。

最近の歴史研究の潮流としては、マルクス・レーニン主義というイデオロギーから離れ、社会経済史への偏りが修正されつつあることが指摘できる。特に近現代史の分野では、ソヴィエト政権とロシア民族・ロシア文化の崇拜という大前提が一気に崩れ去って、歴史事象の捉え方が大きく変わり、歴史叙述が大幅に書き改められつつある。研究対象としても、これまで半ばタブー視されていたジャディーディズムやバスマチ運動が急浮上し、1930年代に「ブルジョワ的」、「民族主義者」という烙印を押され粛正された、フィトラト、チョルパーンなどの作家・知識人の再評価が進んでいる。中世史の分野においても、侵略者とか封建領主とかいう言葉で片付けられていた歴史上の人物が一躍注目を浴び、伝統的宗教としてのイスラーム、及びその牽引車たる聖職階級や神秘主義教団が果たした役割を肯定的に評価しようとする動きがある。この点は、特にティムール、バールブル、ホージャ・アフラルに対する、最近の関心の高さに如実に反映されている。

しかし、このような潮流は民族主義的感情に流され、歴史研究の姿勢としては不適格な方向に傾く危険性をはらんでいる。ソ連の崩壊と共和国の独立に伴ってウズベキスタンでは、これまで表面化しなかった反露感情が社会全体で増幅し、逆にイスラーム信仰や伝統文化が著しく復興、知識階級の中でも民族主義的発言が目立つようになってきた。様々な場におけるロシア語からウズベク語への使用言語の移行は、現状を無視した速度で進んでおり、学術研究においても、非ウズベク系研究者は勿論のこと、少なからぬウズベク人研究者がウズベク語による論文執筆や研究発表に頭を痛めている。またウズベク語による学術書の増加は、旧ソ連学界での孤立につながり、特に東洋学の分野で続いてきたサント・ペテルブルグ学派との交流に支障を生じさせかねない。

このような社会状況の背景には、ウズベク人大衆の反露的・民族主義的な感情を政権

維持に利用しようとする、当局側の意図が見え隠れする。マルクス・レーニン主義の呪縛からようやく解き放たれた研究者たちは、今度は民族主義という枷をつけられつつあるのである。より具体的に言えば、帝政ロシア植民地時代や革命に関する研究では、これまでと正反対の前提を強制される危険性がある。また、中世史の研究においても、民族の英雄あるいはイスラーム信仰の体现者と目された人物を美化し、必要以上に肯定的評価を下す傾向が生まれつつある。一例を挙げれば、後代にティムールの作と偽って書かれたはずのペルシア語作品二編の翻訳が、最近相次いで、十分な説明もなく、ティムールの著書の翻訳として出版された。勿論そういう流れに反発する研究者も多いが、社会の風圧と当局側の意向から完全に自由であることは極めて困難である。差し当たっては、これを不可避的な“揺り戻し”の時期の産物と見なし、近い将来彼らが民族主義的感情を乗り越えてくれると期待するのが、外国人研究者として妥当な態度であろうか。

しかしながら現在のウズベキスタンの学界は、それ以上に深刻で切実な問題を抱えている。財政難である。上からの形ばかりの経済改革は一向に結実せず、一般国民の生活と同様、科学アカデミー所轄研究機関の経営も危機に陥っている。紙の値段の高騰を反映して、学術書の出版状況は1992年から目に見えて悪化しており、本稿で紹介した東洋学研究所と歴史研究所の出版計画が順調に実現されるとは、まず考えられない。科学アカデミーの各研究所では経営合理化や人員整理のため先述の「学術共同研究班」システムなど様々な試みが行われている。最近では、生活のために学術研究を捨てて研究所を去る若手研究者や、研究よりサイドビジネスの方に精を出す研究者は珍しくない。そういう中で、1992年歴史研究所のババベーコフ博士 X. Бабабеков が主催して組織された中央アジア諸民族史研究所は、現時点では研究所ではなく人的組織に過ぎず、最初の出版物である論集『トゥーラーン史』の内容も学際的なものではないが、科学アカデミーの枠を離れた学術研究活動の模索として評価できよう。

尚、本稿作成に当たっては留学期間中に東洋学研究所の副所長マンナーノフ博士、同研究所研究員で研究を離れてもお付き合い戴いた、サリーモワ女史 Ф. Салимова やババジャーノフ氏、歴史研究所の研究事務長ジュラーエフ氏 М.Д.Джураев、同研究所研究員で筆者の指導教官ムクミーノワ博士並びに中世史セクションの方々から得た情報が大いに役立った。ここに記して深甚なる謝意を表する次第である。

最後に、筆者が参照した文献、並びに本稿を補う意味で参考にして戴きたい文献の幾つかを以下に列挙しておく。

- М.Б.Баратов, Центр востоковедной науки в Узбекистане,
Народы Азии и Африки, 1979г.- №3
- Н.А.Кузнецова / Л.М.Кулагина, *Из истории советского востоковедения(1917-1967)*,
 Москва, 1970.
- Б.В.Лунин, *Библиографические очерки о деятелях
 общественных наук Узбекистана*, т. 1-2, Ташкент, 1976-77.
- Б.В.Лунин, Узбекистан как один из центров советского востоковедения,
Востоковедные центры в СССР, вып. 2, Москва, 1989.
- С.Д.Милибанд, *Библиографический словарь советских востоковедов*, Москва, 1970.
- 小松久男「中央アジア——再生への胎動と試練」『国際問題』1992年5月(第386号)
 同 「中央アジア現代史への問い」『海外事情』1992年6月(第40巻第6号)
 同 「冬のタシュケント」『イスラム世界』第41号(1993)
- 根村亮「日ソ交換留学制度をめぐって」『季刊チャイカ』第11号(1989年5月)